

# 万華鏡

— 一世相に映し出された教育の文様 —

小林一也 著

本書は、混迷と閉塞の時代にあって、「教育はいかにすれば可能か！」を求めて、中学校、高等学校、大学、幼稚園と60年を教育一筋に歩んだ著者が、日々の世相を鋭くとらえた短編の随想集である。

その内容は、平成21年7月31日から平成24年3月16日までに、特定非営利活動法人「u-Schoolコンソーシアム」のホームページ内レインボー広場に掲載された文章を大幅に加筆・修正し、まとめたものである。

本書の構成は、第1章「人に向き合って生きる」、第2章「自然とともに生きる」、第3章「日本と世界」、第4章「教育によりそう」、第5章「文化と社会生活」、第6章「生命を磨く」と「あとがき」で構成されている。

各章は、少ない章で21項目から多い章では31項目の短文の随想で構成されており、肩肘張らず気軽に読みこなすことができる良書である。

各章から、一編づつその一部分を紹介する。

第1章、「人づくりの本源はどこにあるのか？」では、「人づくりの人は、自分か他人か。つくりだすのは、人間の本性（徳、品格など）か属性（知識、技能など）か。そして、人づくりにエネルギーが含まれているかどうかも気になる。しかし、一番気になるのは、人が自分か他人かというところにある。人づくりの対象が他人であるとき、私は人づくりという表現は使わない。政治家が国民に、教師が教え子に、親が我が子に、人づくりでかかわる前に、自分づくりがあるからである。自分を深く見つめよう。それが人づくりの正体…」と述べている。

第2章「今様自然学のすすめ」では、「自然

科学と自然学とはこんなちがいがあある。自然科学は、生物を死体にし、解剖し研究する。自然学は自然をありのまま、フィールドワークにより研究する。山裾に寝そべり、生きている自然の動きをとらえながら知見をまとめていく。前者は静的、固定的で信頼性の高いデータが得やすく、後者は、動的、相対的で、システム把握などには適していよう。…」と。

第3章「個人のヨーロッパと集団のアジア」では、「…個人的と集団的の、ダンスと盆踊り、その差は鮮明である。欧米の人々は、食事のために働き一家団欒を楽しむことが多く、個人中心、時に利己的でさえあるという。ところが日本人は働くために一緒に食べ、みんなと行動もいっしょ、個人の顔が見えないともいう。このちがいは、長年の生き方のちがいであろうが、そのちがいが弱点をさがすのではなく、お互いのよいところを探しとりたい。…」と。

第4章「奉仕の心なくしてなんのための教師か」では、「競争の激化が、世の中を包み込んでしまった。失敗を貴重な経験ととらえて、励まし合って育てていく仕事の間が、医療の世界からも、そして学校からも、影をひそめてしまったようである。…」と。

第5章「人間の歩く速さから見えてくること」では、「…東京駅で出勤を急ぐ女性の速さと京都で歩く女性の速さのちがいで驚いたことがある。…京都の産業がみんな盛んになるのはどうしてなのであろうかと考えた。ゆったり歩くは、文化の深さを表しているのであろうか。京セラも、ワコールも、京都で小さく生まれ、大きく育っている。人間の歩く速さには適値があるのではと考えた。…」と。

第6章「教のほうがかやさしく、育は難しい」では、「…教は具体的で測定し量化しやすく、育のほうは精神的で量化しにくい…」と。

（早稲田電子出版局A5判239頁¥1800）（山下省蔵）